創刊号

成寿

SEIJU

1983 夏季

横浜 善光寺刊

残暑御見舞申し上げます

皆様のおかげをもちまして当寺開創
十五周年を迎えました　ご縁に
従来書いしてありました拈華を改め
蓮華寿とし　当創刊号をお送り
致します　何卒御高覧くださいたく
又御感想など頂戴できれば幸せに
存じます　まずは略儀ながら
御挨拶とさせて頂きます

合掌

昭和五十六年九月一日

蓮華山善光寺住職　黒田武志

各位殿

華の香り

華の香は
風にさからいては行かず
栴檀も多揭羅も
末利迦もまた然り
されど
善人の香は
風にさからいつつもゆく
善き士の徳は
すべての方に薫る

「法句経」

成寿

SEIJU

創　刊　号

本尊釈迦牟尼佛

ごあいさつ

山主　黒田大圓

この地に在った小庵をゆずり受け、善光寺と命名したのは今から十五年前のことでした。正にゼロからの出発でした。しかし、み佛のご加護と檀信徒の皆様方のまことに恵まれた出会いと絶大なる御協力御支援、そして御鞭撻を頂戴して今日の盛栄を招来することが出来、感謝感激のほかありません。

釈迦殿の竣工は、宗祖を通して釈尊に還るという私の念願のあらわれであり、今後は釈迦殿を拠点とし、釈尊のみ教えを体して布教教化活動の充実に弄精魂の智をもって邁進する所存でございます。

大本山総持寺開祖瑩山禅師は、「瑩山今生の仏法修行は、この檀越（だんのつ）の信心によって成就す……この故に、師檀和合して親しく水魚の昵（ちかずき）をなし、来際一如にして骨肉の思いをいたすべし」と示しておられます。これによっても明らかなごとく、私の仏道修行、善光寺の歩みは皆様方檀信徒の方々の御信心によって結実したものであり、今後もまたそうでありますから、寺とお檀家は水魚の交わり、骨肉の至情をもって堅く結ばれなくてはなりません。私も努力します。精進します。どうぞ檀信徒の皆様、善光寺と共に光明の道を歩み、成寿のよろこびを迎えようではありませんか。

華の香り

あいさつ　黒田大円　4

カラー特集■開創十五周年記念式典によせて……8

カラー特集■開創十五周年記念茶会……14

詩　■釈迦殿を讃える……赤間義徳　12

特　集■開創十五周年記念式典〝偉業を讃えて〟……18

お不動様の御威光を蒙って……黒田　俊雄　18

シルクロードの仏様もよろこぶ…伊藤喜三郎　19

これ人に遇うなり……村岡　有尚　23

打つ人も打たれる人ももろともに…東郷　敏　24

講元として……佐藤達太郎　29

ありがとう……黒田　武志　30

座　談　会■善光寺0歳から15歳まで……32

彼岸説話■追善行の果報……58

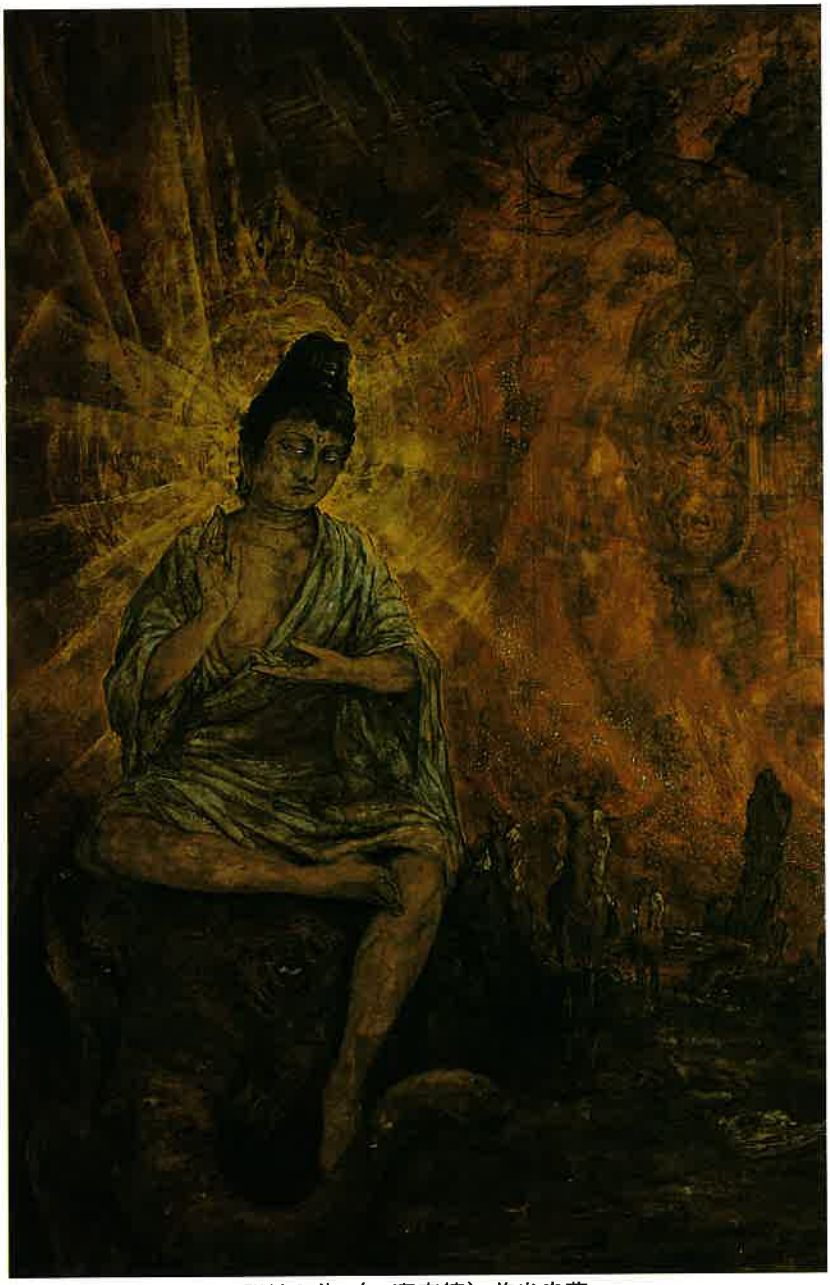
詩　■十一面観音によせて……遠藤太禅

編集後記

●表紙絵・題字・カット　伊藤喜三郎

●口絵写真　五十嵐千彦

大日如来図（桃山時代　善光寺蔵）



説法釈迦（三喜庵筆）善光寺蔵

静かなたたずまいの中の善光寺全景

特集／開創十五周年記念式典

龍聚鳳翔

龍が集まり、鳳が空に舞う。この上ないめでたさを祝う語。

上・準備万端ととのい、参列者を待つ受付
下・〝不動真言〟念誦三昧の黒田方丈

ゼロから出発して僅々十五年、成寿山善光寺はいまや横浜随一の大寺となった。既成教団としては正に驚異の奇蹟である。

この大業を成しとげたのは、もとより現方丈黒田（大円）武志師の抜群の力量と不惑の実践によるものだが、現方丈がいかに出会いを大切にしたか。出会いの素晴しさがこの奇蹟を生んだものとも言える。

人との出会い、仏との出会い、こんな素晴しい出会いに恵まれるとは現方丈は稀にみる徳の人である。

檀徒は、方丈を心から信頼し、不動殿、そして釈迦殿を、心のよりどころとし、憩いの場として親しんでいる。

五月二十八日午前十一時より、不

本寺光真寺方丈を導師に記念法要

動明王の大祭に因んで、開創十五周年記念式典が挙行された。まず記念法要は、不動殿を式場として、本寺光真寺方丈黒田俊雄老師を大導師とし、二十数名の寺院の随喜を得、四〇〇を起える檀徒参列のもとに盛大裡に厳修された。引続き不動殿において記念式典、ハナ肇さんの記念講演がおこなわれ、東郷敏氏の聲涙共にくだる祝辞と併せて参列者を魅了した。

祝宴は釈迦殿において、参列者の美声の競演に時のたつのも忘れて十五周年の感激にひたった。

これから善光寺は、創業から守成に移る。創業は易く、守成は難し。いよいよ寺檀一如の精進が期待される。

献茶湯のお儀式・導師は本寺光真寺方丈

一同〝善光寺の歌〟を斉唱する

記念講演終って聴集と握手するハナ肇さん

山主のおかあさんと奥さん

釈迦殿を讃える

赤間　義徳（檀徒）

扉を左右に開くと
静かな明るさにみちた空間がひろがる
私の目がひろがり　心がひろがる
ひろがっていく私の心を迎える
王　三　昧
書は文字の意味をこえて
筆者の禅定の姿をあらわし
ここですする一杯の茶にも
筆者の心境のしたたりが溶けている
階段を昇ると
須弥壇上　三千仏を背に
お釈迦様がお坐りになっておられる
お坐りつづけて二千年
激しく揺れ動く現実世界の
微妙なバランスの秘密をここに見る

善光寺開創十五周年
昔風にいうなら元服の年
折からおうし座オリオン星雲の暗黒星雲の中に
新たな太陽系が生まれつつあるという
ここにも新たな光が生まれつつある
黒田大円方丈は
未来に向かって開かれた仏法を説く
耳を澄ますと
仏天蓋(ぶってんがい)より降る黄金(おうごん)の光の雨の中
新たな仏法の音楽が響いてくる
釈迦牟尼仏を太陽に
涅槃へ導くシンフォニーの最初の音が響いてくる

喫茶去

濃茶席点景

〝風雅〟

開創十五周年。そして、釈迦殿の落慶及び不動殿・庫裡の増改築竣工を記念し、その添釜として、六月十一日午前十一時より記念茶会が催された。

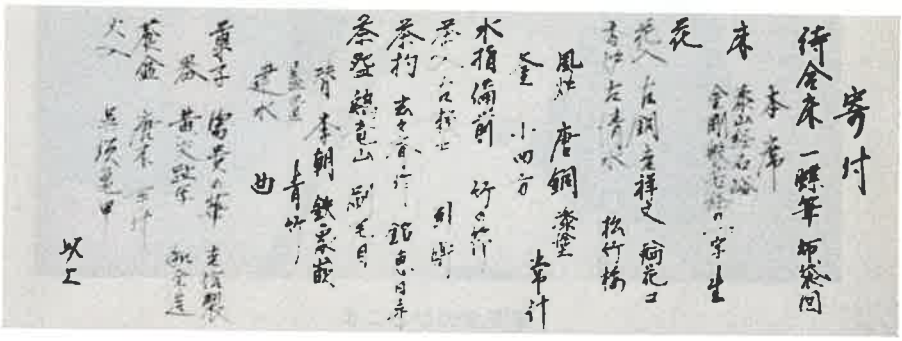
席主である黒田方丈は、駒沢大学茶道部ＯＢで組織している〝一服会〟の会長なので、同大学茶道部講師佐々木宗清先生が濃茶席を、部員の学生達が呈茶席を受持たれた。加えて

薄茶席のひとこま

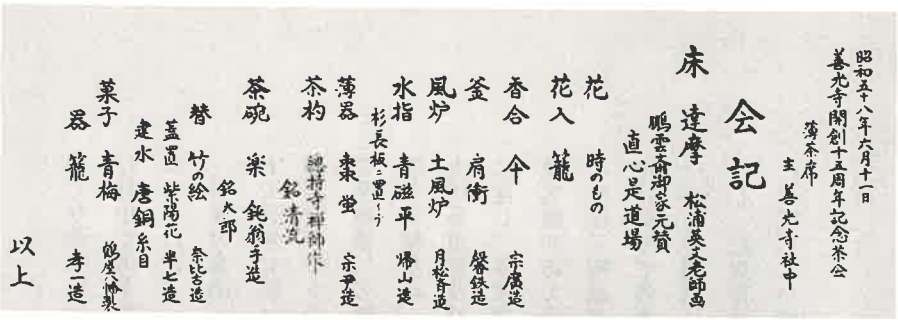
善光寺茶道教室（講師　新美昌道師）の社中で薄茶席を担当し、計三席が設けられた。

前夜の豪雨ですっかり洗い清められた浄域に朝一時のしゅう雨あり、正にかっこうの茶会日和。〝室閑にして茶味清〟の感を深める。来席者は、善光寺檀信徒、佐々木先生社中、駒沢大学茶道部及び友部校ほか百七十名に達し、各席満席で、点心には釈迦殿客殿があてられた。

午後三時過ぎ、各席終了し、後片付け済んで各席関係者で会席。なごやかな雰囲気に包まれた一と時を過ごし、記念茶会の成功を祝すると共に、互いに今後の精進を誓い合った。


寄付
待合床 一蝶年 師筆図
床
花
風炉 唐銅
釜 小四方
水指 竹の花
茶杓
茶碗 朝鮮
菓子
以上

会記……濃茶席


昭和五十八年六月十一日
善光寺開創千五周年記念茶会
薄茶席
主 善光寺社中
会記
床 達摩 松浦英大老師画
鵬雲斎御家元賛
直心是道場
花 時のもの
花入 籠
香合 宗廣造
釜 肩衝 磐鉄造
風炉 土風炉 月松斉造
水指 青磁平 帰山造
杉長板三畳
薄器 棗 蛍 宗尹造
茶杓 総持寺禅師作
銘清流
茶碗 楽 銘大郎 鈍翁手造
替 竹の絵 奈比古造
蓋置 紫陽花 半七造
建水 唐銅糸目
菓子 青梅 鶴屋八幡製
器 籠 孝一造
以上

会記……薄茶席

これ人に遇うなり

開基家
村岡有尚

先代社長が、当時大本山総持寺で修行中の黒田方丈にはじめてお会いしたのは、今から二十年前のことであります。

道元様は、天童如浄禅師にめぐり会って、「まのあたり先師をみる、これ人にあうなり」と感激しておられますが、先代は弱冠二十五歳の黒田武志師を一見して、「これ人に会うなり」の感を深め、その人柄に傾倒し、必ず大成する人物として将来を嘱望されたのであります。先代の眼に狂いはなく、その後黒田師はタイ・インド、そしてアメリカで修行を積み、帰国早々当寺を開創され、ゼロから出発して僅々十五年にして今日の盛栄を招来されたのであります。

今年は奇しくも先代の七回忌に当りますが、モラロジーを心の糧とし、人心救済を念願として仏様に帰依した先代だけに、今日のこの盛儀をどんなにか悦んでおられることでしょう。

開創十五周年にして当善光寺は磐石不動のものとなりました。これからは、釈迦殿及び不動殿を中心として正しい仏法を弘通し、人心救済、心華開発にさらに一段の御精進をお願いして、開基家の祝辞といたします。

打つ人も打たれる人も もろともに

株式会社ナリス化粧品常務取締役
東郷　敏

只今ご紹介をいただきました、開基家の代理として参らせていただきました東郷と申します。今日、善光寺の十五周年という、誠にめでたい日でございますが、この十五周年の今日があるのは、この十五年前の第一日、第一歩があったと思います。このめでたい時に、ぜひそのころの方丈の姿、お気持を伝えさせていただきたいと思います。（方丈、よろしいですか？）

今も伊藤先生からもございましたが、私が方丈と巡り会いさせていただきましたのは、総持寺の夏季摂心におきまして、たしか昭和三十七年であったと思います。その時に私、はじめて、先代社長開基に連れられまして、給料のために坐禅にいってまいりました。その時に、私は坐れないものですからとにかく姿勢が悪かったのでしょう。もうほんとうに感情をこめてたたきあげられる方がありましたので、私も恨みを持って、坐禅よりもその当人を確認させていただいたのが、只今の方丈であるわけです。それで、その恨みは消えるものではございませんで、いよいよ打ち上げの日に、

私は社長とともに、帰り仕度をさせていただいておりました。そこへ飛び込んで来られたのが只今の方丈でございました。私は申し上げたんです。

「先生、悟りというのは、何んですか」と。そしたら先生は、

「ワッハッハ。悟りがわかれば、私はこんな所におりませんよ」

アレッと思いました。この人はお坊さんであったんだけど、いっしょだったんだなーと、何んともいえない親しみと、何んともいえない安堵を持ちまして、ひよっとしてこの先生と将来連れ立って、ついて行けば将来いいことがあるんではないかと、そのような気がしたもんですから、社長に、実はこの方がいちばん恨みをもってたたいておった……あのたたきには何か理由があるのではないかと思って、会社にお呼びして私共の坐禅の指導をしていただきたいものだと申し上げましたら、それはいいことだ、ぜひ呼ぼう、ということで帰りました。三日目でございました。総持寺に電話させていただきました。

「こういうことでございますので、先生、社員教育においでいただけませんか」といいましたら、

「いかせていただきます。いつですか」とおっしゃるから、

「あしたです」といったら、

「いきます」

といわれておいでいただいて、その時二日三晩会社を休んで全社員が坐禅をご指導いただいたわけでございます。私は、たたかれたことと、何か、反抗的にもお返ししたい気持がございましたので、幹部社員で十五人ぐらいでございましたか、打ち合せをして、先生をこらしめるにはこれしかないというんで、とにかく、全員が最初から最後まで、警策を待つ合掌をしつづけていこう、そうすればたたかなければいかんのだから、たたき続ける先生はきっとこたえるにちがいないというんで、さあ、一時間におそらく三百ぐらいの警策をうけ続けまして、私達の衣は破けますし、血はふきで

ますし、そうして先生の手はだらんとしていますし、手はまめでまっか、血だらけのその中で、社長が申しました。「おまえらのは坐禅でない。あれは喧嘩だて、あんなことしてたらいかん…」と、こういうようなわけで、その中ではじめて男が男に惚れるといいましょうか、とにかく抱きついて、共に生きたい、その気持が培かわれまして、先生はそれからまもなく総持寺での修行を終えられ永平寺に行かれ、そしてこんどは、

「社長、インドとタイにいきたいんだが」

ということで、お釈迦さんの生誕の地で修行したいんだと、それならばというんで、社員こぞって協力をさせていただいて、インドとタイにお行きになり帰られてまだ報告の口がかわかぬあいだに、今度はアメリカに行って坐禅の布教をしたいとこうおっしゃって、またアメリカの方にお行きになり、とにかく先生と付き合ってからは私達は追いまくられ、先生がこられると、ぞっとすることばかりが続いても、なお先代の社長という方が、この方に、この方に、ということでやっていきますと、その心が会社の結束、ナリスの利益に還元され、ナリスは先生を知ることによってどんどん利益も上げさせていただきました。まさしく先生はナリスの利益に貢献していただいたわけでございます。私達はあきんどでございますから、きれいな心は持ち合わせておりません。でも、もうけたお金を使ってくださるのが先生だったわけでございます。

そしてちょうど十五年前でございます。今日の十五年は先生の結婚十五年でもあるわけです。そして七月のあるとき、私が東京に出張してまいりましたとき、先生が東京の支店においでになりまして、「先生、また何んですか」といったら、「実は東郷さん、これなんだけど」「これって、何んですか」「ちょっと見てくれ」と見させてもらったのが、あばら屋が一軒建っていたものを見せていただきました。「実はここにどうしても寺を興こしたいんだ。私は急いでいるんです。人の心を救うことに、私、やらせてもらわなければいかんのだが、お金がないんじゃ」と。「ホラまた来た」と思って、「そら先生、簡単にお金は集まるものじゃありません。会社もそういつでもお金があるものではありませんが、先生がおっしゃるのだから社長に話をしてみますが、いくらですか」といったら、「七百二十万円かかります」と、今から十五年前でございますからちょうど一億円くらいのお金に感じます。

「それじゃ先生、ほんとうに買うんですか」「買いたい」と。「きまった会社のお金よりも一人一人の小さなお金がほしいんです」と。貰うについても条件をつけられるわけです。ほんで、「東郷さん、あんたは北海道から沖縄まで歩いているから、その間に、できたら一人一人話をして、お金を集めてくれないか」といわれるから、訳も分からぬまま私は約束をして「じゃ先生、集めましょう。何年ぐらいですか」といったら、「三ヶ月です」とおっしゃるんです。「そりゃ、先生三ヶ月じゃ集まらん」といったら、「あの土地も家も、三ヶ月時間をおいてしまったらなくなります。だれかにわたってしまいます」と。だから、わずか九十日だと、おっしゃる。私も今まで物を売ったことはございますが、けれど思想とお名前で金を集めたことはなかったのです。それで社長に申し上げまして、そのことをさせていただき、約千名ぐらいだったと思います。

その頃です、その話を終わると同時に、

「東郷さん、実は今日、私は見合いがありまして」と。

「見合いって何んですか」

といったら、実は、

「もう独身協会会長をやめて、私も結婚する気になった。寺をすすめるにはやっぱり女房がなくてはいかん」

「そりゃね、先生、こまります。金はほしい、結婚はしたいでは困るが、見合はいつ、どこでですか」といったら、

「不忍の池の、あのホテルのあすこで待っています。この話が終われば、私いくんです」「そりゃ先生、こまります。その女の人をことわって下さい。ことわれなければ、先生、私が行ってことわってあげましょう」と、私は先生といっしょに、その見合いをぶっこわしにいったわけです。そして「先生、永平寺の三番目にえらい単頭老師のお嬢さんで、倫子さんという方がナリスの社員で社長の秘書でいらっしゃるんです。あの方をもらって下さい。好き嫌いの問題でありません。お金の問題です。あの方さえもらってくだされば、あの方の名前を使って、私はお金を集められます」といったんです。さいわい先生は、倫子夫人に一目ぼれでございました。そして、ついに十一月に千名の方から、約壱千万円のお金が集まりまして、この第一日目があったわけです。それで、先生の心意気というか、情熱といおうか、私はこの先生のすべてに傾倒して、ナリスの先代もほんとうにこの方にほれて、そして今日があるように思います。それからお集まりの皆様方の、お力、お心で、こんな、りっぱなお寺が興隆して、これから人心救済の基盤が樹って、まったく大変な勢いで発展されることだと思っております。大変僭越なことを申し上げましたが、方丈、おゆるしください。倫子夫人のために、このお寺が出来たと思っております。ありがとうございました。

最後に、ナリス現社長は、先代社長に負けず劣らず善光寺に尽し、善光寺の繁栄を祈念し、物心両面の御協力をしておりますことを申し添えて、私の祝辞といたします。

講元として

成寿山善光寺身代り不動明王講元

佐藤達太郎

お不動様の大祭にちなみ、当善光寺開創十五周年記念式典が挙行されましたことは、洵にめでたく、また有難いことでございます。

当善光寺のお不動様は、武志方丈様が、托鉢で日本を一周行脚されました時、不思議な御縁でお受けすることになった身代り不動明王様であります。

今から十五年前、この地を御紹介申し上げたのは実はこの私でございますが、その時は小さな庵があっただけで、しかし莫大な資金を必要とし、果してどうなるものかと案じたものでしたが、その都度身を変じて七たび願いを叶えてくださるという身代り不動明王様の御利益のおかげで、次々と難関を切り抜けただけでなく、発展に発展を重ね、今日のこの盛大な記念式典を迎えるに至ったのであります。

この身代り不動明王様の御利益を頂戴いたし、みんなが幸せに豊かな生活が出来ますようにと、善光寺不動明王講が結成され、不肖私が講元として、お仕えすることになりました。一人でも多くの方々に、身代り不動明王様の御利益を蒙っていただきたく、今後大いに精進するつもりでございますので、何分の御賛同を賜わりたく、善光寺開創十五周年記念式典に臨み、一言御挨拶旁々お願い申し上げる次第でございます。

ありがとう

成寿山善光寺山主
黒田武志

皆さん、ありがとうございました。本当に、ありがとうございました。十五年目であります。まだほんの駆け出しでありますんで、これからもお助けをいただいて、善光寺に御縁があってよかったというようなお寺にさせていただきたいと思っております。今日がありますのは、皆様のおかげであります。私はお坊さんになってよかった、これが天職だと、そう思って頑張っております。残念なことには力不足でありますがね。これから一生懸命修行させていただいて、ほんとうに皆様にお仕えをして、仏様のお守りをちゃんとさせていただきたいと思っております。

今日は、伊藤先生はじめ開基家を代表して東郷常務さんにおでましをいただき、区長さんはじめ、地元では町会長さん、理事長さん、石屋さんの皆様方、全員おでましをいただいております。総代さん、ほんとうにありがとうございました。岩間さんありがとうね。西島ドクター、建物たったよね、建物、建ちましたからね、あとは心ですよね。水沢さん、りっぱな建物をおつくりいただきありがとうございました。富士銀行の支店長、金はいくらでも使え、心配するなと言ってくださいましたからね。建ち上がりましたよ。桐ヶ谷寺から栗原閣下、ありがとうございましたね。伊礼社長、電気工事ではもうかんなかったね。鈴木さん、越石社長、坂田社長、熊谷さん、吉田先生、遠い所から

ありがとうね。本当に皆様のおかげであります。こうやっておりますのは仏さんにお仕えさせていただいて、という役目のことだけであります。

母親が来ておりますので、おふくろと皆様にお礼を申し上げたいと思います。おふくろです。八十二になります。親不孝をしておりますがね。母親です。ありがとうございましたね。倫子、お礼を皆さんにね、ありがとうございます。本当に、ありがとうございました。

東郷さんから お礼のおたより

開創十五周年も檀家の心を寄せ合いお互いが心を尽くしての、まことに立派な御祭でありました。全てが見事であり、善光寺ならでは味わい得ぬ威光と、神秘的で感動的な絶景は生涯心にやきついて忘れるものではございません。ヤッパリ方丈さまは偉大です。

方丈さまのご信念とご人徳が寺ごと周囲ごと、人心までも、グイグイと引き込み引きづり廻しておられる様が、全く驚異であり、将来さらにの発展と興隆が洋々としていることを観じぜずにはおられませんでした。社長も報告を聞いてよろこんでおられました。

重々の破格の御土産ありがとうございました。

取り敢えず御礼迄。

合掌

から15歳まで

～その発展の秘密～

司会　今日はお忙しいところ、どうもありがとうございました。善光寺も開創して十五周年を迎えることになり、今月の二十八日、身代り不動明王の大祭を期して記念式典を行うことになりました。併せて、今まで星野老師が編集しておられた『拈華』を今度は六十頁ぐらいの冊子に改めようということで、創刊号が大体、八月末頃に出る訳なんです。

そこで皆様方にお集りをいただき、善光寺がこれまで大きくなった底力というものが一体どこにあったのか、あるいは、皆様方と善光寺の方丈様との出会いとか、それからまたいろいろなエピソードもあることだと思

●座談会

善光寺0歳

お話くださった方々

善光寺婦人会会長・善光寺檀徒総代伊藤喜三郎氏（伊藤建築研究所々長）夫人
伊藤初枝様

善光寺婦人会副会長・善光寺檀徒総代西島一郎氏（西島産婦人科病院院長）夫人
西島昭子様

善光寺婦人会副会長・善光寺檀徒総代中村治雄氏（防衛医科大学教授）夫人
中村茂子様

善光寺住職
黒田武志師

善光寺監寺・山梨県大翁寺東堂
星野直隆師

司会者
山形県宝泉寺住職・前大本山総持寺副監院
佐藤俊明師

います。そういうものをお話ししていただき、しめくくりとして、善光寺は今後どう在るべきか。皆様方善光寺に何を望まれるのか。それからまた、婦人会として、今後どういう方向に進んでいったらいいのか。こういった点についていろいろお話を伺いさしていただきたいと思うんです。

では会長さん。方丈さんとの出会いについてお話ししていただけませんか。

伊藤　（笑い）……そうですね。

司会　方丈さんの困るような事も遠慮なくおっしゃってください。

方丈　全部困るようなことですね。会長さんとはね、大先生との出会いが最初なんですね。今から十八年ぐ

らい前になるんですがね、昭和三九年の十二月、インドに大先生が癩センターを設計されて、その竣工式においでになる時にご一緒だったですね。伊藤先生とご一緒に四大聖地をお参りして、その後私はタイで修行して日本に帰って参ったんですが、そのタイで修行する時に、大先生が、「一生懸命、頑張ってくれ」と言って叱咤激励してくだされ、タイのバンコックで一杯飲ませていただいて、それがご縁でタイでの修行から帰って来て大先生の家におじゃましたのが、会長さんにお会いした最初の出会いだったですね。

伊藤　そうでしたね。それから、そろそろご縁談のお話がありましてね、それで度々行ったり来たりということで何度かお目にかかって、結婚式にはお仲人をさせていただきまして……

司会　結婚なさったのは何年でございましたか。

方丈　昭和四十四年の十二月です。

三十二才でした。タイから帰った時三十歳で、それからアメリカに行くことになり、アメリカから帰って来て、大先生にお仲人をしていただいた。それ以来、ずーっと…

司会　そうですか。ずい分長いおつき合いですね。

伊藤　はあ。ほんとに長いですね。

方丈　会長さんが四十代でしたからね。今もお若いですけども、美しいでしたよ。やっぱり美人に生まれてくると得だなァと思いました。

伊藤　〈笑〉ありがとうございます。おっしゃっていただけるのは方丈さまだけで……

大先生にお仲人をしていただいた。それ以来ずーっと……

司会　西島さんはどういうご縁ですか。

西島　私はそのあと。結婚は伊藤先生御夫妻で、そのあとの……

方丈　〈笑〉始末をしていただいた。

西島　はじめはこちらの方丈様っていうこと、私ども全然存じあげなかったのです。それがあのーお寺さまの奥様が毎年のように入院なさるということで、

方丈　ようにじゃなくて、毎年なんです。

西島　それで、また黒田さん入院よ。あら、また今年も、というわけで、続けてお子様をもうけられました。奥様のお産も軽く、いつも順調にお巣立ちになられて、お帰りになられるんですが、一度だけ、何番目かのお嬢ちゃんの時にお彼岸にぶつかったものですから、赤ちゃんを連れてお帰りになっても、お忙しいという事で、しばらく赤ちゃんだけおあずかりさせていただいて、方丈様が赤ちゃんをお連れにいらした時に、受付けでお話しなさってらっしゃるお姿がとても印象的でした。

司会　どんな風でしたか。

西島　声が大きくて、受付の人達もびっくりしたような顔してまして、それが一番印象に残っております。そして、そのあと、父が亡くなりました時に、この近くの曹洞宗のお寺ということで、どちらにお願いしたらいいでしょうと、葬儀屋さんに伺ったら、「お宅でお産した黒田さんがそうなんですよ」ということで、それからずーっとです。母のお葬儀もお願い致しました。

　そしてたまたま釈迦殿の建立にあたって西島が建設委員長の大役をお引き受けさせていただき、落成式というところまでもって参りました。その間におきまして、主人も職業柄仲々忙しいものですから思うようにお手伝いもできませんものですから、私が婦人会の方で何か少しでもお役に立てばということで、婦人会に入会させていただきました。そしたら早速副会長なんていう大役を仰せつかって、なんかほんとに何もできないんですけど、伊藤様、中村様に助けていただいて

今日まで参りました……

司会　中村さんはどういうご縁で？

中村　そうですね。私の実家の父親が先代の御住職様にお世話になったようです。当時私どもがアメリカに（主人が留学して）おったものですから、御葬儀のことはよくわからないんです。あの、出席できなかったものですから。で、戻りまして、方丈様もタイでご修行なさり、またアメリカでご勉強なさり、たいした方だということで、そこからご縁がはじまりましてね。普通のお檀家様以上に行き来をさせていただくようになりましてね。いろいろ教えていただくことも多かったんですが、たまたま中村の母が具合が悪くなり、御葬儀のこともご相談し、また、とても立派なご葬儀をここで白純ご老師様をご導師様にしていただき、たいへん身に余るご葬儀をしていただいたと、ありがたく思っております。一番の親孝行が最後にできたんじゃないかと思っております。

方丈　中村ドクターに、御前（開山白純大和尚様のこと）の主治医になっていただいておりますから、それはもう親子同然のおつきあいでした。

方丈様、ホントに努力なさいましたネ

中村　それでまあ、十五周年おめでとうございます。ほんとに感無量でございます。あの時のことを思いますと、方丈様、ほんとに努力なさいましてね。いろんなことでご相談を受けましたが、それに助言できたかどうかはわかりませんけれど……

方丈　いやァ、皆さんのおかげで……一杯飲みに行くところは大先生のところかドクターのところかで、大

先生は「あんなまずいものどこがうまいんだ」って飲まないんです。ところが、中村ドクターはニコニコして、「飲んだら病気がなおる」っていうんです。

司会　皆様方ずい分長いおつき合いなんですが、長いといってもわずか十五年です。それでこれだけ多くの檀家をかかえるようになった、その原動力ですが、これは中村さんがおっしゃったように方丈さんのご精進のたまものだと思うんですが……

中村　それに魅力があるんですね。ですからこうしてお檀家の数がどんどん増えるんですね。私にしても両親がお世話になり、それがご縁で方丈様とおつき合いをいただき、色々と吸収してまいりました。ほんとに方丈様の魅力でございます。

伊藤　やっぱりそれじゃないでしょうか。なんか魅かれるものがあるんですね。

西島　とても良く気がつかれるんです。うしろに眼があるんじゃないかと。〈笑〉　それはもう実によく、微に入り細にわたって気がつかれますね。ほんとうによく気がつかれます。

司会　また奥さんがいいですものね。

伊藤　あ、奥様もね。

西島　それはもう…

〈笑〉

伊藤　やっぱり奥様がいらっしゃるんで方丈様も自由奔放におできになる。

司会　ほんとにあれだけ内助の功ができれば、ねえ。

西島　そうですね。

うしろに目があるんじゃないかしら

方丈　会長さん、副会長さんとまるで同じじゃないですか。〈笑〉

中村　ほんとによく落ち着いていらして、またこういうお仕事は誰にでもできるっていうことでもないですからねえ。

星野　確かに、方丈さんと奥さんは「琴瑟相和す」っていうか、非常によく調和がとれているということとそれから、この方丈は、「倫子」「倫子」でねえ。朝から晩まで倫子でしょう。どんなに倫子さんがいいかってことがわかります。

方丈　いやァ、言わないとおこられるもんですから。

〈笑〉

中村　いつかね、何回言うだろうかと、家にごめん下さいっていらした時から数えたんです。十何回位はありましたね。ほんのちょっとの間にねえ。

司会　七年前、方丈さんといっしょにタイに出かけた時でした。帰り香港に立寄り、ランタオ島に出かけました。旅行中はじめてのんびりして方丈さんといろいろお話したのですが、その時よく「倫子」が出るんです。奥さんにはまだお会いした事なかったんで、どういうお方なのかな、と思ってましたが、お会いしてみて、なるほどこりゃ言うわけだな、と思ったですねえ。

方丈　いやァ皆さんのおかげですよ。これは会長さんに仲人していただいて、会長さんに本当に大お手柄をなすっていただいたんで、私としては皆さんにお尽ししなくちゃ申し訳ないと思って、日夜努力をさしていただいております。これまでに十五年でさしていただいたということは、これ以上の嬉しいことはありませんですね。

司会　方丈さんの魅力と精進、それにもう一つ大きくなる、大きな要因になったのに、ナリスとの出会いがあったんじゃないですか？その点のことを方丈さんからお聞きしたいんですけれども。

方丈　昭和三十七年春、駒沢の大学院を出て総持寺に修行のため上山安居し、九月に送行（下山）し、十月に永平寺に安居しましたが、四大不調のため一ヶ月で

送行して全国を行脚しました。そして十二月に師寮寺（師匠の寺）に帰りました。すると、師家（指導者）養成のための特別僧堂が開かれることになりましたので翌年の春第一期生として総持寺に上山しました。そのつぎの年、昭和三十九年、夏季摂心の時でした。本山の日曜参禅会の会員でモラロジーに所属している松木盛人という方の紹介でナリスの社長さんと今の社長さん、営業部長（今の常務）の東郷さんと、もう二人お伴の方で五人がおいでになられました。その東郷常務さん、平素あまり坐られないから、足が痛くて動くんです。「こりゃ、動いちゃいかん」と警策でひっぱたいてひっぱたいてあげたですね。そしたら非常に怒りましてね、帰る時に、「先生、ちょっと来てくれっ」ていうんでみんなのところに呼ばれましてね。「先生、質問あるけど、いいか」というので、「どうぞ」といったら、「先生、悟りとはなんだ。それを教えてくれ」というんです。わたくしは即座に、「悟りがわかればこんなところにはいない。わからないから修行してるんだ」と言うてつっぱねたことがそもそもナリスとの縁のはじまりでしてね。それからナリスの社員の方に坐禅を教える事になったんですが、その次の年特僧をやめてインドに行く時に、お金がなかったものですから、ナリスにお金を借りに行ったんです。それがナリスとの縁を深くしたんです。「成功したらお返ししたいけれども、お金を貸していただけますか」といって、ナリスにお邪魔をしました。社長さんが「いくらいる」というんで「一年位修行するんですが、まア五〇万でしょ

悟りがわかれば、こんなところにいませんヨ

うか。半分でもいいです。成功したらいずれお返しします」と申しました。「じゃ、考えよう」というんで別れたんですが、その後「用意したから来てくれ」っていうんで、五〇万円をいただいたんですね。それで、タイに修行に行って、インドに行って、またタイで修行して、帰ってきました。それで帰って参りましたところ、高階管長さんの秘書をやれといわれ、高階猊下の秘書をやっておりましたが、もう少し修行をしたいと思って今度はアメリカへ行く。アメリカへ行く時も社長さんが私に五〇万円をくださった。それを禅センターに御寄附を申し上げて、今度はアメリカから帰ってきて、新寺を建立したいと物色していると、ここに長光寺という非公式の小さな庵があって、それを建てられた林方丈さんが亡くなられて、あとどなたもまだ決まらないというので、それをゆずっていただきます時に、当時のお金で六百万円近く必要でした。これは建物だけで土地が入っていません。それでナリスに相談に行って、一千万円をいただきました。一千万円というのは大変な金額ですが、当時は、一人一口三百円で、六百人の、その当時は六百人はいないで三百人の社員でしたかね。それに四、五千人のセールスマンの方ですが、その方々が一千万円の御寄附をくださった。そのお金で土地を買わせていただいた。

司会　えらいもんですなあ。

方丈　まあ、そういうわけで、順調なスタートを切ったおかげで、ここまで早く伸びたのです。それでこの寺をおゆずりいただくことになってから、伊藤先生が、さきほど婦人会の会長さんもおっしゃられますように、「もう、そろそろどうだ。いくつだ」といわれるので「三十二才」と申しましたら、「嫁さん貰わんといかんな」というんで、お仲人をしていただいたと、いうところが、そのスタートのですね。ナリスのかげの力をいただいたんで、一気に花が咲く原動力になったんですね。

司会　伊藤先生も、先見の明があったですねえ。

伊藤　やっぱりこれはご縁ですねえ。

司会　伊藤先生、その最初の出会いはインド旅行、これも仏縁ですね。

方丈　そうです。在家のお方は大先生お一人でしたからねえ。あの時、大先生がインドの癩センターを設計なすって、その竣工式がなければもう二度と大先生とお会いするチャンスはなかったですねえ。

司会　ほんと出会いって大事ですねえ。

方丈　そうですね。この善光寺が大きくなったっていうことは、出会いを大事にさしていただいたことですね。これが善光寺が世に脚光を浴びる原動力の一つですね。

司会　その出会いでもう一人考えられる方が佐藤さんですか。

方丈　ええ。佐藤達太郎さんという方で、父親の代からのおつき合いで、そもそもこの方がここ（長光寺）紹介してくれたんですね。

　といいますのは林方丈さんが父親の勧めで長光寺をお建てになりましたけれども、早く亡くなられた人です。この林方丈さんに佐藤達太郎さんがお手伝いをしたんです。というのは、林方丈さんは総持寺の知客（しか）といって、いわば営業部門を担当してました。父親はいわば副社長をしておりました。佐藤達太郎という方は水道関係の出入り商人をなさっておったんです。それでそういう事で親しくなすっておりましたから、林方丈さんがお寺を作るならという事で手伝いをなさいましたが、さっきも申しましたように、林方丈さんが亡くなられ、「そのあと誰もいないから私にどうか？」と

やっぱりこれはご縁ですねえ

いうことで、ご紹介をいただいた事が、ここに参る因縁となったんですねえ。

司会　そうですか。方丈さんの出会いの中では、お集まりのお三人と、それからナリスの村岡さん、東郷さん、それに佐藤さん、こうした人達が主だった方々ですねえ。

方丈　あとは地元では石屋さん。非常にお助けをいただき、ご援助をいただきましたけれども、最初の出会いというのは、そういうようなところでございましたですねえ。

司会　人との出会いはそれくらいにしまして、次は方丈さまと仏様との出会いについてお伺いしたいのですが「身代り不動明王」とか円空仏とか、その他たくさんの仏像がございますが、それらの仏様に助けられてここまで伸びてきたという大きな力もあると思うんですがね。そういった点で一つ、方丈さん。眼に見えない仏様の力についてお話していただきたいと思うんですが。

方丈　日本を一周、行脚をさせていただいた時の体験が、僕としてはひとつのものの考え方の非常に大きな基盤となっているかと思うんです。日本を一周しました時に岩国の、あるお寺に泊めていただいた。そのおばあちゃんは字が読めないんです。勿論、書くこともできません。そのおばあちゃん、喜んで私を泊めてくれたんですね。その時に、あんたにおみやげやるからというて、五センチぐらいの木の観音さんをいただいたんです。これが、仏様を正式に自分で勧請するというか、おまつりをすることになったんです。

　それで、日本を一周したんですが、その一周した理由というのは、ある時、やくざがたずねて来て、「やくざをやめて足を洗いたい、助けてくれ」というのがそもそもの修行の原動力です。警察に自首するよう、おすすめしたんだけど、どうしても逃げるというんで、有り金を持たせて北海道に逃げさした。さてその後どうなったかという事もさだかではないんですが、逃がして非常に後悔をしてるんです。生きているのか、殺

されたのかわかんない。なんとかしてあげたい、そのご両親にもお会いしたいと思って、日本を一周修行して最後にそこのお家をたずねたんだけれども、住所がでたらめで、詐欺だったんですね。詐欺師のおかげで日本を一周した。私としては、人生というのは容赦しないから一生懸命生きるんだ、というような事をしみじみ感じました。その時、道中岩国で小さな仏さんをちょうだいしたんです。次の年、総持寺に安居いたしますわけですね。総持寺に安居して、三年目に今度はタイ国に修行にゆき、インドからタイ国に行くという時に、三十歳になりますのにいまだ何も残していない、世の中にですね。それでタイで修行中、万が一何かあった時は、これは、親には申し訳ないけれども仏様だけは無事に帰れるように念持仏を作らしてもらおうと思い、一葉観音といいまして、道元禅師が中国から帰られる時、大波で船が沈みそうになった。その時に「念彼観音力」と観音様を念じたところ、一枚の葉に乗ってる観音さんが天から降りてきて、波をしずめて船の難破を救ったという、そういう逸話の仏さんに接する事ができて、これを自分の念持仏にしたいというんで、はじめて私が仏様をお願いしたのは昭和三十九年の年でしたから、十九年前ですね。はじめて自分でお守りする観音さんをお願いした。そのお願いに行った時に「あなたはどこだ」というんで、「目黒だ」と言うたら、「目黒不動のせがれか」といい、「このお不動さんを、あんた、どっかへ持っていってくれ」と言うんです。どうしてそんなことをいうのかワケを聞きますと、或る日この山口という彫刻師のところに四国の霊能者がたずねてきて言うには、「不動様が、突然夢枕に立ち、福井の大きなお寺のふもとに彫師がいる。その彫師のつくった不動様をお迎えしろ、と言われるので、はるばる四国からやって参りましたが、お宅に来ておどろいたことには夢のお告げと全く同じところです。どうか私にこの不動様をお授けください」という。しかし、山口さんにしてみれば、どうしたものか、どうしてもその霊能者におゆずりする気になれず、おこ

とわりしたのですが、それが気にかかって仕様がなかった。丁度そこへ私が行ったものですから、「どこへでも持っていってくれ」というような言葉になったんですね。そこでその仏さんをお預りすることになり、大

お不動さんをお迎えした御利益ですね

きな仏さんをお迎えする一番最初の因縁になったんですね。で、そのお不動さんをお迎えして、光真寺におまつりをしていただくことになり、私はタイへ行って修行をし、帰ってきてアメリカへ行って修行をして帰って来て二年目ですから、四、五年、光真寺さんにお不動さんをお預けしておったんです。アメリカから帰って、これから一生懸命まつらせていただくというんで、光真寺からお不動さんをお受けしたんですが、そのお不動さんのおかげですね。このお不動さんは、身を七つに変じて、私が困る時は必ず救ってくれるというお告げだというんで、そのお不動さんをお迎えしたことがこの寺が一番大きくなった御利益ですねえ。

身代り不動明王をお迎えする時、私夢を見たんです。その夢というのは、総持寺が燃えてるんです。こりゃ、たいへん、ということで、先師と共に、先師は総持寺顧問会の会長でしたから、案内して総持寺に行ってみると総持寺は焼けておらず、勅使門のうしろの長廊下の中雀門のところにお不動さんの台座だけが残ってる

んです。お不動さんが身代りになって焼けて総持寺を救われた、というお告げがあったんです。それ以来お不動様は、善光寺に関する限り、常に身を変じて、どんな願いでも叶えさせてくださったと、私は確信しております。

その後、総持寺に国際部が出来たりして、タイなんかに行ってたくさんの仏さんをお迎えすることになる。それからもう一つは、円空仏ですね。これは伊藤先生からおあずかりしているものですが、これ笑っておるんですね。それで、大先生も気持ちが悪いから、お寺でお祀りして欲しいといって、この寺にあずかることになった。この仏さんは、「日限り不動明王」というて、一日に千里の道を行って帰ってくるという。召し上がるものは洗米に芋ですね。じゃが芋、さと芋なんでもいい。芋とこんぶを供えて欲しい。いうことは、それは災難よけだった。大先生は設計なさいますし、そういうことで災難をよけられる。それからキウリ十本食べたい。赤飯一升食べたい。これを二十八日にお供えする。その代わり、一日に千里の行程を行って必ず帰ってくるというお告げだというんです。

それから霊験あらたかだというのは、中国の七宝焼の仏様を、これは、病気は絶対しないというお告げがあった。その仏さんはお姿は観音様だが、薬師様のはたらきをなさる。それから大先生（伊藤喜三郎先生のこと）が文部省の或る上の方からいただいた中国元朝（一二六五～一三五二）時代作の聖観音像をおあずかりしました。

それからタイの仏像、実はビルマ仏ですが、これは銀座の新田ギャラリーの社長から、仏像を引取ってほしいとのことで七躰を勧請したんです。

次は大黒さん、これは光真寺の檀家の方が彫ったものですが、先師（御開山）が、「お前のところは何もないんだから持ってゆけョ」といってくださったものです。

それから、いま釈迦殿の建っている土地、この土地を購入しようと思い、開創十周年記念行事として写経

一万巻と聖観音様の勧請を発願したんです。聖観音様は高村光雲の弟子で、鋳型では第一人者の沢野盛一という方に制作を依頼しました。高村光雲が七十年前に聖観音をつくられ、それが出世作となったのですが、それを鋳造したのが沢野さんで、それ以来、沢野さんは高村光雲に認められて出世するんですが、高村さんの出世作聖観音像を三尺三寸に拡大して世に残したいというのが沢野さん一生の念願でした。その念願を、この土地の因縁によって叶えさせてあげることができ、その因縁でこの土地が手に入ったのです。

次に写経の方はお檀家の伏見暲さんの奥さんが一人で「般若心経」壱万巻を書いてくだされ、そのほか数十人で数千巻納経してくれました。その誓願力で土地が手に入ったのです。

さっき日本一周行脚にふれましたが、実は宗祖を通して釈尊に還れ、というのが私の念願でしたので、日本を一周して各地の仏舎利塔全部にお詣りすることが最大の目的だったんです。こうした私の願行に自然と仏像が集まり、また、蜜教に関する舎利塔がたくさん納まる因縁ができたのではないかと思います。

宗祖を通して釈尊に還るというのが私の念願だったのですが、たまたま新興宗教集団の真如苑でも同じ考えを持っており、従って仏舎利を奉戴したい強い希望を持っておりました。そこで私が、かつて修行していたタイ国のワット・パクナムに渡りをつけ、昭和四十一年七月、高階管長と真如苑にお仏舎利が奉呈されました。その時私も奉戴させていただきました。丁度そ

宗祖を通して釈尊に還るというのが、私の念願だった

の年の秋、タイ国のチェンマイで世界仏教徒会議があり、高階猊下と真如苑教主が日本代表で出席されたついで、ワット・パクナムに答礼にゆかれた。そのお世話をしたお礼として真如苑から、教主謹刻の涅槃像をいただいたわけです。

星野　方丈さんが確乎たる信念のもとに一貫して精進されたので仏様も集まり、仏様が見護ってくれて善光寺も発展するんですね。

司会　人との出会い、仏様との出会い、その素晴しい出会いに恵まれ、これをどう生かしてきたか。その辺のお話をおねがいします。

方丈　まず手はじめに日曜学校をやりました。鶴見大学保育科の学生、三、四人を呼んで、近所の子どもたち五〇人ぐらいを対象にして、はじめは前の庭でやっていましたが、狭いので公園墓地の広場でやりました。三年続けましたが、だんだん寺が忙しくなりましたので、寺の事業一本でやることに切替えました。

司会　檀家はどのようにしてふえて行ったんですか。

人との出会い、仏さまとの出会い。素晴しい出合に恵まれましたね

方丈　お葬儀などの場合、お金はいりませんヨ、誠心誠意やらせていただきます、ということをモットーとして実行したんです。すると葬儀屋さんや石屋さんがバックアップしてくださり、口コミで檀家がどんどんふえていったんです。もっとも立地条件もよかったですがね。こうして、当初の目標は檀家三百戸獲得。予想通り進み、次は五百、八百と目標をアップして、開創五周年の時は六百、昭和五十三年には十周年を迎えずして千軒を越えました。

それから寺は行事さえすれば檀家がふえるとの確信のもとに行事の充実をはかってきました。昭和四十五年二月節分会の行事をはじめておこないました。この時は光真寺から福マスを三十個借りて来て、光真寺の焼印の上に紙を張り、武志流のやり方でしたが、お客はたった十人でした。それが今日は数百人になってます。行事をしなくちゃダメですね。行事も単発ではなく継続して行なわなければいけませんね。それに問題は行事の内容です。善光寺では新年祈禱会、節分祈禱会、お彼岸法要、花まつり法会、不動明王大祭、お盆の大施餓鬼会、成道会等には必ず法話を入れ、法話のない時には、咄家を呼んだり、または福引きやバザーなどをやり、参詣者に、寺との交流、参詣者相互の心のふれ合い、そして物心両面のおみやげを持ち帰っていただく、そしてまた、寺に来てよかったというよろこびとやすらぎを得ていただくようにつとめております。大事なのは布施です。還元してあげることです。

司会　関係団体の活動も活発ですね。

方丈　小林寺挙法が月二回坐禅に来て八年になります。来年になるとダルマ面壁九年ですね。それからボーイスカウト、これは不定期にではありますが、坐禅に来て二年になります。

それから青年会・婦人会ですね。

星野　今年は婦人会がつくられまして五年目。その婦人会が段々として発展し、婦人会の皆さんが一つの喜びを持っていらっしゃるような気がするんですよ。そして皆さんの会員意識というものが高まってきておりまして、私は婦人会に非常に大きな期待をしておるわけです。

なんにしても家庭を動かしているのはご婦人ですよねえ。婦人の力が動いてくると家庭が動いてきます。そうしてくると今度はいろんな組織活動が段々にできて参りますから、善光寺が発展をしていく姿としては、片一方に青年会が動き、片一方では婦人会に動いていただくと、善光寺の両輪ができるような気がしますね。これは将来、期待される事だと思いますね。

私は婦人会に非常に大きな期待をしてるんですヨ

司会　それから医事相談で、中村先生がご奉仕して下さいますね。

中村　はい。九月十五日でしょうか、敬老の日にさせていただいているようですけれども、もっと利用していただいていいと思いますね。

司会　そうですね。寺で医事相談を開らいているなんていうところは、ここ以外にないんでしょうねえ。

西島　それにねえ、中村先生に診察していただくというのは、普通ですと、仲々できないことですものねえ。

ですから、こちらにお越しいただく時にほんとに気安く、といったら申し訳ないんですけれど……是非もっと宣伝して大勢の方ねえ、お年召した方がみて頂いたら、なおいいんじゃないかと思います。循環器ではねえ有名な先生でいらっしゃいますから。

方丈　それはもう、日本一ですからねえ。

星野　中村先生から脈をとってもらうなんてことは、普通じゃできませんからね。

西島　普通、表口から行ったら、順番があって、大変

中村先生に診ていただくことは、普通では仲々できないことですヨ

ですものねえ。

方丈　そうよ。まず半日は軽く待たされちゃうし。ほんとに、診てくれるかどうかわかんないよ。

星野　方丈さん、これはだいぶ先の話ですけれどね。幸いに二大ドクターがおられるんです。片一方は子供産む方でしょ、片一方は、お年を召した方のほう……

方丈　お寺で病院を作っちゃえばいい。

星野　それをいま言おうとしてた。それでね、わたしはね、将来ですよ、善光寺の一角に医療相談室か、健康指導室とか、なにかそういうものがあってね、この日は、善光寺に行けば、すばらしい、「医王如来」から診てもらえると、いうことになったらね。

司会　設計は伊藤先生。

〈笑〉

星野　その設計はね、伊藤先生が粋をこらしてこしらえる。そうしたら、いや、大変ですよ。それは横浜に大きな光を投げますねえ。

方丈　そうですねえ。

司会　まったく、そうだと思いますねえ。

〈笑〉

司会　では、どうでしょう。善光寺さんの将来のビジョンもボツボツ出てきましたが、どんな事を期待なさっておられますか。どんなことを望まれますか。なんかございましたら。

伊藤　善光寺さんに行ってホッとするという、やすらぎっていうか、まずそれが、欲しいと思いますねえ。今若い人は子育てに忙しく、まためまぐるしい世の中だから、心のやすらぎを得たいものです。私仏教の事はわかりませんでしたが、両親を見送りましてはじめてなんかこうお線香を焚いて手をあわせるということがやすらぎというか、何というか、ホッとする、そういう気持ちになってきたんです。ああ、やっぱりこういう所へ来て手をあわせることがほんとに人間なのかなっていう感じがしてるところでしてね。……これは年っていうものがあるんだろうと思いますけれども、若い人にもね、ここへ来て、ほっとしていただいて、

心を開いて、お話しできるっていうような雰囲気がほしいですね。それがあってはじめてみんなと仲良く何かやろうっていうことにもなるんじゃないかなあという気もするんですけれどね。

司会　それについて、方丈さん、どういうお考えをお持ちですか。

方丈　いま会長さんが言われるように、釈迦殿にしても、不動殿にしても、釈迦殿は、わたし手前味噌ですがね、本当に仏様が喜んでいるんだという、すべての、そういう荘厳（しょうごん）（飾りつけ）だと思っているんですねえ、それから旧館は、この、不動殿の方は不動殿でやっぱりお不動さんが喜んでいる、仏様が喜んで、皆を迎えてくれるんだ、と、いうようなね、なにか、そういうような感じだし、そういうふうに、ま、何か、こう、言ってるなあ、というような、思っとりますがねえ。

司会　伊藤先生の設計の釈迦殿はほんとに、やすらぎの場所ですね。

方丈　そうです。これはね、日本中のお坊さんに見てもらいたいと思います。いや、皆さん、まねをして頂いて、それでいいところを取って、将来の日本の仏教界に光明を放ち、悩み苦しむ人々のために、何か役に立つ釈迦殿にして欲しい、でね。そういうものを感じますねえ。

司会　毎朝ねえ、二人で一時間、坐禅してますが、実にいい気分ですね。

方丈　五時からやってますが、気持ちいいですね。

司会　本山の僧堂あたりでは、ああいう風にはできませんね。

中村　そうですか。

司会　はい。今度、皆様方にも、お泊まりいただいて……

中村　いやいや、とんでもない。

〈笑〉

星野　いや、方丈さんね。いま会長さんがおっしゃった、善光寺に来ると何かひとつのやすらぎを感じる、そういうものが欲しいと、そうありたいということは

ね、これは言葉は抽象的ですけれどね、なんか、考えなきゃいかん事だと思いますね。

どうでしょう、副会長さん、あのね、どんな事をお寺様にしてもらったらいいかという事ですね。我々も知りたいと思うんですよね。

中村　私はね、今までの善光寺さんが大変評判もよろしくて、明るくて、ほんとにここに入るとね、普通のお寺さんのイメージじゃないっていう、ことですね。それを、いつまでも保ってもらいたいということです

方丈様のスキンシップはものすごい―

ね。あのう私が、この婦人会ができた時に、ごあいさつに、こんな事を申し上げたんです。たくさんお寺さんがありますけれども、こうして善光寺さんにお会いしたことが、ものすごく御縁があるってことを感じたんですね。ただ御縁だけじゃなくてね、やはり、こう、あたたかみがあったり、方丈様に魅力がおありだから、それはずーっと続くわけですよね。だから、そのあたたかみが、寺が大きくなってもいつまでも、持続していってもらいたいということですね。

方丈　なるほど、そうですね。

中村　あんまり規模が多くなるとすれ違いが出て来ないか知らん。それはとても不安でありますし、出来るだけそういうことがないように。

司会　そうですね。十五年経ちました。これからは、守成（まもり）ですね。ですから、これからは、あんまり拡張という事を考えないで、内容の充実をはかって行かねばなりませんね。

中村　そうですね。このお寺にはあたたかみっていう

のがあるんですね。方丈さまにはおなかを割って話せるんですね。また方丈さまは、「あ、おばあちゃん、心配ないよ。そんな事はちっとも心配な事じゃないよ」って、こういう風にスキンシップをしちゃうんですね。そういうスキンシップが、ものすごい――〈笑〉

司会　巧まずして出来るんですからえらいもんですね。

〈笑〉

中村　その魅力あるバイタリティをいつまでも持っていただいてね。

巧まずしてできるんだからえらいもんですねえ

伊藤　そうですよ。

中村　そう思っております、わたくし。

西島　中村さんのおっしゃる通りだと思います。あんまり増えてしまっても、そのまとめるという事がすごく難しい問題になると思いますし、だから、今の現状維持で内容をどういう風に充実さして行くかという事が、やはり、ひとつの課題じゃないかと思います。で、まず、どういう事を手始めにするか、ということでございますね。

司会　ですから、何んか、こうやって欲しいというようなもの、具体的なものがあれば、

西島　あのう、今月でございますか、十日に史跡めぐりがございますね。ああいう事はやはり一番楽しみでもあるし、勉強にもなるし、一挙両得のような気がいたしますね。また、神奈川県の中には他にもたくさん行ってみたいと思う所もありますし、それから、また、あの、意外と知られてなくてすばらしい所がたくさんございますから、まず、そういう事から、ま、一ヵ月

置きにでも、まわるようにして。それは星野御老師様に色々、考えて頂いて。

星野　そういう会ですね。人が集まりますと会話ができますよね。楽しい会話ができるってことが、大事なことですよね。

西島　家庭のご婦人が多いので、あまり難しい事は長続きしないように思うんです。私ども、いろんな会にでておりまして感じますことは、最初に盛りだくさんにしてしまうのは、すごく結構なんですけれど、尻切れトンボで、続かなくなりますから、まず有名な所をね、回ったり、それが一番よろしいんじゃないでしょうか。

星野　同時に楽しいことですからね。

西島　はい、楽しゅうございますね。その行き帰りのお話とか、また、向こうでのお食事とか、楽しい中に心の交流ができますね。

伊藤　そうですねえ。

司会　そういうのもいいですね。他に何かございませんでしょうか？

中村　あのう、星野御老師様がはじめていただきました般若心経のお話、とても勉強になるんじゃないかと思います。あのー、仏教の言葉って難しいんですね。なじみがないので、少しずつでもやっていけば。

司会　皆様、大変喜んで聞いておられますから、是非、いらしていただけますか。

中村　はい、はい、伺わせていただこうと思っております。

星野　ご婦人の中から話が出たのですが、写経をしたいという話がございましてね、それならば写経の会も悪くないが、写経してお経を浄書する以上は、そのお経の言葉やら意味を知りたい、という事になりますと仏典研究になりますからね。ですから仏典研究を始めましたけれどね、難しい般若心経と取組んじゃった。これをもう少し別のお経にかえれば、大乗仏教の中には、面白くて、ためになるお経がいくらでもございますからね。だから将来はそういう別の仏典を皆さんと

一緒に読んだり考えていくなんてこともいい事だと思うんです。それから、今お話の出ました旅行会ですね、ま、研修旅行ですね、こんなこともいいことだなあと思いますね。

司会　写経会はいつごろからなさいますか。

方丈　九月、秋頃からやりたいと思って、おります。それから写仏もいいですね。伊藤先生が日本の第一人者でおられますが、大先生お忙しいですから、どなたかにでもお出ましいただいて、これも秋ぐらいからと思ってます。暮れになれば、歳末助け合い運動もですね、会長さん方にも骨折りをいただいて、困る方々に、色々な面で手を差しのべたいというような事も、予定しております。何から何まですべてうまくっていうわけじゃないですが〝念ずれば花開く〟といいますから、うまく行くのではないか、と考えておりますが。

司会　それから、遠大な計画、留学生派遣の構想の一端をお話し願えませんか。

方丈　今度善光寺のやるべき事は、大きくするのではなしに内容の充実だということです。そこで考えておりますことは、人づくりですね。今後、若い日本を背負って立つような方を育てて行く。善光寺では、万難を排しても、努力をしたい。いうことは、海外に留学生を派遣しようと思ってます。これからは英語ができないとだめですね。中国語も理解しなくちゃいかん。そこでアメリカ、中国にねらいを定めて留学生を派遣する。それから仏教の面からでは、何んといっても上座部仏教、日本は大乗仏教ですが、上座部仏教を軽んずることはできない。そこで、タイ、セイロンというような所に、タイを中心にして留学生を回したい。そして今後日本を背負って立つ人々をつくって、善光寺のためにいろいろお働きをいただきたいというような事を、再来年あたりを目標にしてやって行きたいと、こう思っておりますんですが、いかがでしょうか。

司会　それは素晴しいことですね。

方丈　金はちゃんと作ります。

〈笑〉

司会　それから、私、十月まではちょっと忙しすぎるんです。それ済んだらテレフォン法話をはじめたらと思ってますが、どうでしょう。

西島　それはいいですね。

中村　ありがたいですね。

司会　善光寺婦人会の今後のあり方でございますね。これにつきまして、皆様方、何かお考えがございましたならばおっしゃっていただけますか。もし、なんだったら、星野御老師から、婦人会に望むということで、お話しいただいたらどうでしょうか。

方丈　そうです。それを実行すれば、会長さんね。一番おやすいことですから、言っていただいた事をちょっとやればいいですから。

〈笑〉

星野　婦人会が出発してから今年は五年目になりますけれども、まだ入りたい方、何かご縁があれば入りたいという方はまだたくさんあるんじゃないかと思います。ですから、入会したいという方をできるだけ近いうちに、早くですね、御入会を求める、と。それから婦人会はだんだんと育てていかなきゃならないと思うんですね。育てて行くにはやはり会員意識を高めて行くという事が非常に大事だと思うんです。だからこれからの行事の中で、婦人会の会員である意識、婦人会というものに対する理解、それからもう一つは、何にしても善光寺の婦人会でございますからね、そこは世間一般の婦人会とは、ニュアンスも違いますし、目標も違う、そういうところに仏教の精神といいますか、仏佗の精神というものがいろんな形で、知らず識らずのうちにあらわれてくる。そういうものが必要かと思います。ですから、これからの私どもの希望するところは、婦人会の集会が定期に行われるということと、それから、会員意識という婦人会事業への協力、それからできるだけ、その活動に参加をして頂く、そういう意味で、婦人会の参加を呼びかけて、皆さんの求められる事をお寺側としては検討していく、という事で、婦人会をできるだけ盛り上げて行くことが大事かと思

うんですが。その方法として、先程、お話しが出ました史跡めぐりとかね、そういう風な事も方法として、積極的にとり上げて行きたいと。

伊藤　まだ、何んか、甘えの、ね、婦人会で、もう少ししっかりしないと、甘えて、ばっかりで。

なごりは尽きねど

中村　ね、この十五周年を期してね、またあらたに発足という気持ちで、充実させて行きたいと思いますね。

司会　発展をして頂きたいと思いますね。

星野　そして、その方向としましてね、このお三人の会長、副会長さんはね、この地域センターと言っては失礼ですが、人間センターですね。はっきり言えば、あの人を、あの地方ではあの方を、ひとつ中心にと、この地方ではこの方になってもらうというふうにですね、何人か人の中心が将来できて行きますと、そういう人達の連繋というか、連絡によりまして、地方人に小さな、この組織が誕生して行く。これを一つの、方法、じゃないかと思うんですがね。

司会　これから、組織作りと、それから適切な事業の展開。こうした点に、ご尽力をお願いすることに致しまして、善光寺さんの今後一層の発展を祈念します。

彼岸説話

追善行の果報

「或る雑誌で見た話」として『実演禅戒法話』（田中鉄道師著）に次のような美談が載っている。

東京の郊外に或る大きな邸宅があって、奉公人も大勢おり、女中（お手伝いさん）だけでも六人おった。その中に新参者のお杉という十八歳の娘がおった。彼女は口数少なく、まめによく働く女だった。

或る日、一人の女中が、桶の底の抜けてるのを知らずに水を入れたため、台所を水浸しにしてしまった。その女中は「誰が桶の底を抜かした？」と、大声で怒鳴ったが、みな知らぬ顔をしている。するとお杉が、「私が粗相いたしました」とあやまり、女中頭から大目玉を頂戴した。

そしてまた或る日、茶の間にあったコーヒー茶わんを誰かがあやまってこわしたのだろう、叱られるのをおそれて、接着剤でくっつけて盆にふせてあった。それを知らずに、奥様が客にコーヒーを出そうとして、客の前で恥をかかされる始末となった。奥様はたいへん立腹して女中頭を呼びつけ、「調べて犯人を連れて来なさい」と厳命した。女中頭が一人一人調べたが、誰もが、知らぬ、存ぜぬ、という。するとお杉が「私がこわしたのです」と詫びた。女中頭がその旨報告すると、奥様はお杉を呼び、直々叱りつけた。

しばらくして、奥様が茶だんすから何かを取り出そうとすると、新聞紙に包んだものがある。何だろう、と開いてみると、大事にしていた南京焼きの菓子鉢が割れて出て来た。奥様は女中全員を集め、誰が割ったのか、と詰問したが、誰も知らないという。するとまたお杉が「私でございます」と白状した。

たび重なるお杉の粗相に愛相をつかした奥様は、お杉に暇をやろうといい出したが、女中頭のとりなしで何とか穏便にすまされた。が、それ以後は、お杉にはこわれるような物には手を触れさせるな、と堅く言い渡された。

その後しばらく何事もなく経過し、お盆の季節となった。十三日、この日は朝から仏間が荘厳（しょうごん）（飾りつけ）され、家宝の古九谷の花瓶が出され、仏前に花が供えられた。

その家に六歳になる坊やがおって、家の中に入ってきたとんぼを追いまわしてるうちに、とんぼが仏壇の位牌の上にとまった。それをつかまえようとして前机に足をかけた途端に家宝の花瓶をひっくり返し、割ってしまった。坊やは誰もいないのをさいわいに、そのまま知らぬ顔で外に出た。

奥様がお供え物を持って仏間に入ってみると、花瓶が割れてひっくり返っている。奥様は忿怒の形相すさまじく、女中一同を仏間に呼び集め、誰がこわしたのか、もし犯人が出ないなら全員に責任をとってもらおう、この花瓶は代々伝わった家宝で、これをこわした

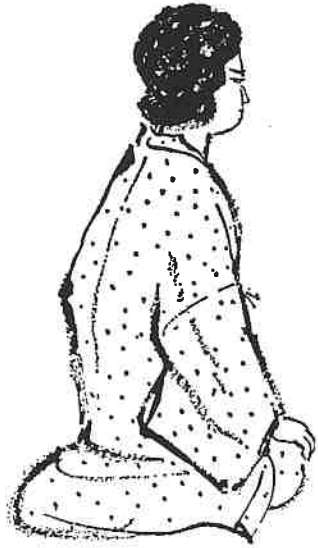
んではご先祖へ申し訳が立たない、ときついお達し。それを受けて女中頭、一同に向い、「いま奥様の言われた通り、私どもよりほかに仏間に入るものはありません。誰かあやまちをした人があるはず。どうか正直に申し出なさい。そうでないと私どもみんなで責任を負わねばなりません。誰も出ないとなると、お互いに誰だろうと疑い合い、お盆というのに暗い気持でおらねばなりません。どうか身に覚えのある人は出てください」と、涙ながらに訴えたが、誰も出ない。さて困った、と思ってると、お杉がおずおず進み出て、「私です」と言った。

「またお杉か。お前にはもう何も言わぬ。今日限り暇を出すからお家へお帰り！」

お杉はとうとう解雇される羽目に陥った。

さて、真犯人の坊や、一度は外に出たが、気になって家に戻ってみると、女中一同仏間で調べられ、お杉が罪を着てくれたので、一時はホッとしたが、悄然として女中部屋に帰るお杉を見て気の毒になり、あとを

私です



つけて女中部屋をのぞき見すると、お杉は荷物をまとめながら、「帰る家もないし、どうしよう」とひとり言をいい、涙を流している。それを見た坊や、たまらなくなって母親のところに飛んで行き、「お母さん、ぼくがこわしたんです。勘弁してください。お杉はぼくの罪を着たのです。お杉をゆるしてやってください」と、哀願した。

わが児の言葉におどろいた奥様は、早速再び女中を仏間に召集したが、当然のこと、お杉は姿を見せなかった。奥様は立ってお杉を迎え、その前に両手をついて、「お杉、すまなかった。花瓶をこわしたのは坊やだった。お前に暇を出したのは私の重々のあやまり、どうか勘忍して、いつまでも家におってください」と、真心こめてあやまった。

すると一人の女中が進み出て、いつぞや南京焼きの菓子鉢を割ったのは実は私です、と言い出す。それにつられて、コーヒー茶わんをこわした者、桶の底を抜かした者が次々と名乗り出た。奥様はホトホト感心し、「昔から、奉公人根性というて、自分の粗相を人になすりつけようとするものだが、お杉は身に覚えのない人のあやまちを引き受けて苦しむとは、一体どういう訳か？」

と、たずねた。するとお杉は涙を浮かべ、

「私は幼少の時両親を失い、兄弟もなく、もとより家もありません。奉公をして流れ渡って来ましたが、両

親の年忌が来ても供養ひとつできません。それで、どこの家でも奉公人の大勢いるところでは、誰がしたかわからない粗相がありがちです。その時私がそれを引受ければ、粗相した人は喜んで安心される。その喜びと安心が亡き両親の追善ともなろうと思って、罪を負わしてもろうたのであります。ご当家に参りましてもその通りであります。ことに今日はお盆というのに、こういう事が起こり、互いに疑い合う、これはまことに罪なことであると思いまして私が引受けて皆さんを安心させたら、それがお盆の供養にもなろうと思いまして……」と、口ごもりながら述べた。

その家の主人、先刻来、次の間から立ち聞きしていたが、お杉の言葉が終ると、つかつかと入って来ていうには、

「お杉、お前の話はみな聞いた。聞いて感激した。いまの世に珍しい心がけだ。人の苦しみを身に引受けるは実に仏さまにもひとしいおこないだ。いま聞けば、お前には親も兄弟もないということだが、今日から私ども夫婦が親になろう。お前を家の養女にする」と。

天涯孤独のお杉が、一躍大家の養女になることができたのは、追善供養のまごころが招いた果報というべきであろう。

「続・二つの月」(佐藤俊明著・井上球二絵)より

編集後記

▼十五年。あっという間に過ぎました。無我夢中でした。さいわい仏天の加護、檀信徒その他有縁の方々のご協力により、どうにかここまで辿りつきました。

これで善光寺も基盤が確立しましたので、今後は布教教化の拡充に専念する所存です。

▽前大本山総持寺副監院佐藤俊明老師は、仕事のため中央に出てこられる機会が多いので、その際の宿を提供し、余暇を善光寺運営の協力に割いていただくことになりました。おかげで本誌も発行できる運びとなりました。

▽私のこれまでの歩みを通して感じますことは、人、人、人づくりほど大事なことはありません。そこで善光寺は再来年を目標に、留学生派遣制度を確立し、善光寺運営のブレーン養成、ひいては仏教界の発展に寄与したいものと考えてます。

その他やりたいことはいくらでもあります。何卒ご協力、ご支援のほどお願い致します。（黒田武志）

▼本山に七年半もおったものですから、こちらでのご縁が多く、当地と自坊の間を往還しております。そして有難いことに、こちらに出て来た際のお宿を提供していただいております。

▽方丈様の素晴しいご活躍、そして檀信徒の皆様の奇特な浄業にはただただ頭がさがります。余力を協力させていただくこと、まことに有難いご縁と存じます。

▽開創十五周年を記念して、従来の『拈華』を発展的に解消して『成寿』が発行されることになりました。さいわい、グラフィック・デザイナーの小熊由美さんが、レイアウト・校正等の一切を受持ってくださいますので、作業は順調に進みました。ご期待をお願いします。

▼真白な道を歩きはじめた『成寿』の旅に、胸を踊らせながら、同行させていただきました。（小熊由美）

成寿　創刊号
昭和五十八年九月一日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野町一六〇四
電話　〇四五（八四五）一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

女人あり
むらさきの嫉妬のほむらに
自らを焼きて苦しむ
或る日観音を見たり
慟哭寸前の微笑の前に
涙とどまらず　すべてを許し
自らも平安を得たりき
なげきの人・悲しみ・恨み・呪い
また絶叫して苦しむ此の世
観音はおん目に涙いっぱいたたえ
かかる人々を拝み給う
かくて　すべての思いは清まるなり
あゝ　十一の面をもつ観世音
ただ黙して立ち給う
おんなみだ　流しつづけて……

———遠藤太禅———

Lactcal C
ラクトカル C

健養茶

ナリス商事(株)

美と幸せをお届けします

ほほえみのごあいさつ

ナリス化粧品

本社 大阪市福島区海老江5-1-6 TEL (06)458-5801(代)